

古城絵図の作図者と城跡の見方について

しろはく 古地図と城の博物館 富原文庫

代表 富原道晴

はじめに

これまで、多くの城絵図展を開催した。平成10年には長野県上田で「戦国時代の城と合戦絵図展」、数年前には博物館開館記念で群馬で「上野動乱 絵図に見る戦国城館展」、一昨年は伊那で「長野県城絵図展」を開催し、本年は安中で「城絵図に見る上州の戦国時代展」を開催した。本年はさらに7月―9月上田の真田氏歴史館で「大坂冬の陣真田丸展」(仮)を計画している。伊那では伊那伊豆木小笠原家甲州流軍学者加藤正治の伊那古城調査絵図11枚を現状縄張図との比較に於いて展示し、さらに、長野県下10か所の近世城郭について、先に紹介した陸軍省城絵図を公開した。安中では、「城絵図の世界」として、展示図録巻頭に城絵図の履歴、中世古城絵図の全貌等中世、近世、最近世城郭の絵図の見方、さらに、3D絵図として、木図、土図を紹介した。又、展示解説では、「1552年の上杉憲政の新潟退去から。1590年の豊臣秀吉による小田原攻めまでの38年間の上州の動乱を紹介した。長い戦国時代の話ではない。現在であれば1人の人間が成人し、定年を迎えるまでの1世代の出来事である。永禄4年1561年に上杉退去後の西上野を抑えていた長野業政が死去すると武田晴信は5―6年にして西上野を席卷した。元亀元年1571年北條5代の英雄3代氏康が、さらに2年後武田信玄が、5年後上杉謙信が逝去すると、織田信長は時を移さず、天正10年1月木曾谷に侵攻、3月には武田氏が滅亡した。しかし、3か月、本能寺の変で信長が死去すると北條氏は滝川一益を追い、上野国を支配した。後、元和元年1615年5月8日、大坂夏の陣で戦国時代が終焉を迎えると徳川家康は翌々月、閏6月13日元和一国一城令を發布、さらに翌月7月7日武家諸法度を発令、新規築城禁止と修理届出制を実施、家康は翌年1月鷹狩で落馬、4月17日には75歳で逝去した。」家康は自らの責任において、事業を仕舞したのである。時は今、すべての現代の事業も同じであるが、速やかな決断と実行が出来るのが天才であり、それを継承することの難しさをうかがわせる。

今回は城絵図の全貌や戦国時代の葛藤ではなく、そのような合戦の結果、時の最高の軍事技術で以て構築され、残された古城遺構とそれを切り取った古城絵図の話である。展示会の中心的役割を果たした中世の古城を対象とし、江戸中期に描かれた古城絵図とその作成者、調査方法について、紹介したい。

1、古城絵図の作成者とは

長野県城絵図展開催に際し、展示に供する絵図を検索していましたところ、伊那古城絵

図が甲州流の膨大な軍学書に埋もれていました。「正治図之」と書かれた寛政7年から11年の現地調査の記録絵図です。調査の結果、正治は加藤正治、伊那旗本千石八代小笠原長著家臣と判明し、甲州流先伝系譜に於いては、岡田勝英の弟子で、寛政年中関東甲信越東海の地を行脚して、戦跡地利を探るとあります。加藤正治は地元である伊那地方の古城の測量を行ったのです。ここに、なぜ、伊那の古城調査がされ、これだけの絵図が残されたかというなぞは解明しました。一般に軍学者による縄張図は写しが多く、現地調査をされた絵図はまれで、信頼性にかけます。ここに見ていただく、調査絵図は小笠原家軍学者加藤正治の原図であり、詳細な現地調査の記録であります。今を去る219年前の城跡の姿と現在の姿を比較してみてください。古城絵図で現地、著者、年代が明確なものはほとんど残されていません。これらの絵図の希少性は明らかです。なお、飯田市教育委員会のご厚意により、小笠原家文書を閲覧しましたが、記録は得られませんでした。また、200年前の城名表示は現在と異なるため、各城縄張図を基に現在地を考証しました。

絵図調査の目的は兵法の研究であるが、単なる兵法城絵図、築城検討図ではなく、軍学という築城の機微を心得た、今でいう縄張り研究のできる築城専門家が描いた現地調査図でそこには近代に破壊される前の姿が現されています。城跡の現状を考えると寛政7—11年の現地調査は極めて貴重である。しかも、伊那旗本小笠原家家臣という来歴が明確である記録であることも代えがたいものである。惜しむらくは219年の間に多くの絵図の散逸が見られることである。

2、調査絵図の事例

長野県辰野町羽場城 信州市邑荻原城 2枚ノ内（辰野町羽場・伊那富村大字伊那富字羽場・220 x 130 m） 参考資料 図解山城探訪第4集上伊那資料編17 宮坂武男 信ノ伊奈郡ノ内内藤大和守殿領地 城内一円羽々村ト云

図上では信州市村荻原城となり、古城と新城の2枚書かれ、古城図は失われている。宮坂先生は新城は文禄頃1592年—5年柴氏の築城と推定されている。廃城後約200年経過、今より約200年前の遺跡の現状図で、近世城郭を思わせる縄張を持つ整然とした城郭が描かれている。今は失われた三の丸の空堀が明瞭に残され、天守台、櫓台が描かれ、畑、農家等当時の状況を克明に描く。三の丸の空堀は自然の埋没による消滅か、現在の調査は二の丸までを城郭とされ、本丸の西南部や二の丸を鉄道が貫通し、破壊している。城郭の在りし日の姿を髣髴とさせる貴重な絵図といえる。この絵図は展示会場でNHKの取材があり、昼のニュースで放映されると地元の研究者が間髪をおかず来場された。

3、古城絵図とは

軍学者の絵図はどのように制作されるのであろうか。それは今日、私たち城郭研究者が

全国の城跡を調査する姿勢と同一と思われます。悉皆調査では古記録で古城所在伝承地、城郭があると思われる地形に登り、遺構を確認します。遺構の存在が確認できれば、遺構の構造、縄張を調査します。既知の遺跡であっても、構造が明らかでないものはまだまだ多くあります。全国4－5万といわれる城跡で、全国の研究者が多年調査し、文化庁が中世城館の悉皆調査を行っていますが（一部は報告書も頒布されず、研究を妨害しています）、遺構が明確な城郭はまだまだ半数に満たないと思われます。

調査は通常、城郭の中心部まで登頂し、郭（平坦面）の周囲を方位と長さで目測します。そこに密生したジャングルがあろうが、踏査するのです。このように切岸といわれる人工の、または自然の断崖による防衛ラインに囲まれた範囲が郭といわれます。次にそこに存在する遺構を見極めます。虎口といわれる入口の構造がどうか、喰い違いか、桁形か、馬出か、土塁か、堀か、次に切岸に副って、塁壁の上部構造が土塁か、土塁には横矢がかかっているか、郭内の堀跡の有無、郭外の防衛ライン、横堀による土塁との一体化、塹堀による横移動の阻止、堀底に障子堀、畝堀による移動の阻止といった防衛上の機微を調査し図化します。次に次の階層の郭で同様の調査をします。郭と郭のつながり、城内の動線、城郭全体の規模が明確になると、この城の主体者、築城目的や時代、仮想敵対勢力が明らかになります。これらは自然の地形から遺構を読み取る作業で、そこには、土塁を見て、土塁と、堀を見て堀と判断する能力が要求されます。無から有を生み出す世界です。同一の対象を描いても、その能力により、結果は異なります。実測図は参考にしますが、2500分の1が全体の城域を推定し、基本土台になる他、等高線の細密な実測図は地形の一部を読み取ることが可能です。しかし、それでも、防衛思想は実測図からは解明出来ません。そこには築城者と同じ視点が必要になるのです。

4、古城絵図の描かれた時代

先に徳川家康による城郭統制について、述べました。元和元年、大坂夏の陣で戦国時代が終焉し、元和一国一城令によって、原則として、1つの国ではなく、1つの藩に1城以外は取り壊され、ここに数万という古城が発生します。さらに、武家諸法度によって、新規築城が禁止され、城郭の修理も届出制となります。これ以降、築城技術の必要がなくなり、幕末、西洋列強の外圧による国防城郭、要塞の出現まで、平穏な時代を迎えます。この間、天草の乱による古城の被害もあり、城郭の研究が実学としての築城技術から、机上の学問となります。

この時代に築城学は兵法の分野として、伝来し、多くの大名が軍学者を抱え、所領の古城の現状を調査し、反旗を翻す勢力や農民、異教徒に利用されることのないように監視されます。また、戦国時代の合戦や古城の調査が実施され、記録に残されます。このようにして、各藩の古城調査の記録が残され、戦跡研究が実施され、一部は現地に依らない仮想の築城設計図まで描かれることとなります。実在の古城の名を関しながら、現状と相違す

る絵図も多く残されましたので、その利用は慎重な検討が要求されます。少なくとも、現状遺構が解明できる能力によって絵図の分析が行われるべきと思われます。

5、古城調査絵図の全貌

全国の大名家や文書館には、このようにして作成された、かつての古城の姿を今に伝える多くのアトラスが残されています。

今回、安中で展示中の西ヶ谷氏所蔵上州西平井城絵図は加藤正治が小笠原家を辞し、江戸に帰ってから調査したもので、実に200年ぶりに富原文庫の平井山城図と再開したことに成ります。この絵図には巻之八、図集九之二とあり、膨大な中世城郭図集の存在を伺わせますが、今のところ、発見されていません。確認できる最多の絵図集は旧陸軍参謀本部保管東京偕行社所蔵の『城塞繹史』で約1440城と伝わっています。原図は昭和20年戦災で焼失し、築城史編纂委員の中山光久大佐による写しが富原文庫に494城、内92城、さらに、紀州藩江川景寿の36古城図アトラスや著者不明の甲州流縄張古城絵図集はしろはく双書7・8・10として紹介しています。甲州流兵法は徳川幕府が進めたため、今回の上州の戦国時代展でも多く展示しています。

市販されている古城絵図集は前田家尊敬閣文庫の諸国居城図、広島浅野家の諸国古城之図が入手しやすく、中世城郭研究の基本図書となっている他、各地に伝来しているものでは弘前藩の築城規範（国文学資料館所蔵）、国立国会図書館の諸国古城絵図、池田家文庫、蓬左文庫、内閣文庫の古戦古城之図、加越能文庫、森田文庫（石川県立図書館）、金沢市立図書館近世資料室、松平文庫、山口県文書館等各地に残され、アトラスとなっているものもある。これらは、幕府提出の正保城絵図や修理絵図、藩政に用いられる近世城郭の絵図や絵図集とは一線を画するものである。内乱の防止、戦跡研究のあとを味わっていただきたい。

6、あとがき

多くの絵図が伝来しているが、作成者の苦労は押して知るべしである。これからも多くの絵図の集積と保存に努めたい。大海で1本釣をするようにいつ未知の絵図が出現するかわからない。城郭絵図については日本最大の博物館を目出している。出日ご協力いただければ、幸いです。